

串珠杯の酒宴記録帖をめぐって

中山 創太

びいどろ史料庫コレクションに含まれるガラス製の酒器「串珠杯」は、酒宴記録帖とともに伝わっている。四冊の記録帖は、甲（文化元〜明治三年・一八〇四〜七〇）、乙（安政四〜元治元年・一八五七〜六四）、丙（明治十四〜三十三年・一八八一〜一九〇〇）、丁（明治三十八〜三十九年・一九〇五〜〇六）からなり、百年ほどの酒宴記録が収められる。本稿では、本誌三十三号で言及した乙を除く甲、丙、丁について、主な参加者を確認していくとともに、参加者の一人として登場する「高木侗山」が旧蔵者であったことを提示する。加えて、串珠杯は大阪福井村（現在の大阪府茨木市）に伝来した可能性についても言及する。

はじめに

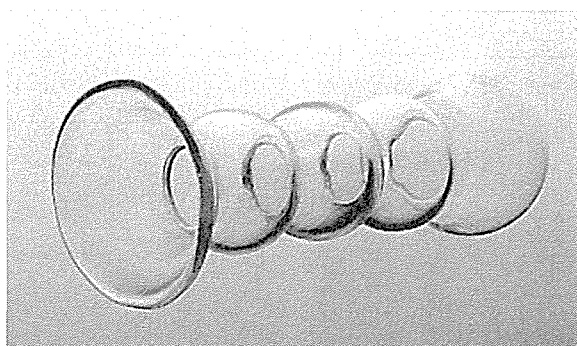
本稿は、本誌第三十三号で採りあげたガラス製の酒器「串珠杯」

とともに伝来する酒宴記録帖（以下、「記録帖」と略称）を紹介するものである。串珠杯とは、四つの球体の上に、ラッパ状の飲み口のある酒器で、酒を注がれると飲み干すまで床に置くことができない「可盃」の一つである。記録帖は、三十三号で仮に名称を付した、甲（文化元〜明治三年・一八〇四〜七〇）、乙（安政四〜元治元年・一八五七〜六四）、丙（明治十四〜三十三年・一八八一〜一九〇〇）、丁（明治三十八〜三十九年・一九〇五〜〇六）の四冊が残っている。記録の中心は、参加者の名前とともに、串珠杯に注がれた酒を、何息で飲み干せるかという点に置かれている。なかには、酒宴の参加

者が揮毫したと考えら

れる詩文や絵なども見
出せ、酒宴の盛況ぶりが
うかがえるといつてよ
い。参加者には、当時刊
行されていた人名録に
名前を確認できる人物
も含まれており、記録帖
は、当時の文化人の交流
を示す資料としても貴
重といえよう。

ここでは、三十三号で



串珠杯 江戸時代後期
神戸市立博物館蔵
(びいどろ史料庫コレクション)

串珠杯の酒宴記録帳帖をめぐって

紹介した乙を除く、甲、丙、丁の三冊の記録帖について、時代順にそれぞれ内容をみていくことにし、主な酒宴の参会者を確認していきたい。そして、串珠杯は、いつ、どのような人々に使用されていたのかを考察する。加えて、前号において旧蔵者の可能性がある人物として提示した、「高木侗山」についても言及していくことにする。

一、甲（文化元々明治三年・一八〇四々七〇）

甲巻は、四冊のうち、最も時代が古い記録帖で、唯一本紙の両面に記録が残されている。仮に古い記録の面を表面とすると、表面には文化元々弘化三年（一八〇四々四六）、裏面には弘化三々明治三年に催された酒宴記録が収載されている。

表面の初めには、「鷺島」なる人物の書「飲中趣」、「鳩亭」なる人物の酒宴図（図1）が収められ、続いて参会者の名前が記されている。酒宴図には、串珠杯を高く上げ、勢いよく酒を飲み干す男の姿が描かれている。画面左手には、扇を仰ぎ、場を盛り立てる男の姿もみてとることができる。賑やかな宴の様子を伝えてくれる。以後、時代が判明する「（文化元年）甲子二月二日」から、酒宴の記録が続いている。「天保三年六月十三日至道庵」の酒宴を記録した箇所にも、〇印に「十」の字の合紋があり、一部順序が入れ替わっているもの、おおよそ時代順に記録されているといつてよい。

参会者には、文政元年（一八一八）の「平安青木」、「平安依田」、天保二年（一八三一）の「豫州今治産日比野光生」、「勢州神戸産永井房汎」、「西湖人市井為尉」など、素性は明らかではないが、伊予、

伊勢、京、近江など様々な地域の人々が見受けられる。また、天保三年六月十三日の「至道庵」における宴席では、「品女」「梁女」など女性（妓女）の名前も散見される。参会者は特定の地域、職業、性別、身分ではなかったようである。

なかには、当時刊行されていた人名録に名前を確認できる参会者も含まれている。例えば、天保三年三月十三日の参会者の一人である望月玉川（寛政六々嘉永五年・一七九四々一八五二）は、絵師として『平安人物誌』（文政五年版）にその名を確認できる。玉川は「無息一曲」、すなわち串珠杯に注がれた酒を一気に飲み干したと記録が残る。「始二して殊に奇妙なるハ一滴も不流、上手二飲しと可謂」と評された玉川は、「続而又無息一曲」に酒を飲み干したようであり、「飲牛段如始平生飲料甚静也」と、その酒豪ぶりに、まるで牛が酒を飲んでいようだと形容されている。また、『平安人物誌』に「書（書家）」、あるいは「碁（棋士）」として収載される河北耕之助は、同年六月十九日の参会者に名前がみえ、「二息半一曲」とある。「碁ハ三段之上手、酒ハ九段之下戸」と、碁の腕前とは対照的な酒宴での姿が、可笑しみを込めて表されている。

裏面は、乙巻と重なる時期も含まれ、参会者も重複する人物がみられる。乙巻の巻頭に「五段杯酒令亭」を揮毫している金本摩斎（文政十二々明治四年・一八二九々七一）は、安政三年（一八五六）十一月九日に「一無息一盃金本観」と名を連ねている。摩斎の記録に続いて、文人風の人物が筵を敷いて座し、蘭を愛でる姿が描かれている（図2）。宴に参会した「鴻雪」という人物が、「漫画」、すな

わち酔いに任せて気のむくままに筆をとったようである。また、「戊午夏六月五日」（安政五年）の酒宴では、「椒園」が「酔題」「我愛貝光録／可以當酒盃／其貌頗奇／偉還醉人／収来」に対し、「墨莊」なる人物が串珠杯と貝の絵を添えている（図3）ⁱⁱⁱ⁾。

なお、三十三号で本器の旧蔵者として推定した高木侗山の名前は、「嘉永癸丑」、すなわち嘉永六年（一八五三）に初めて登場し、その後甲巻には計十四カ所に侗山の名を見出すことができる。高木侗山については、後述することにする。

二、高木侗山について

丙、丁巻の内容をみる前に、前号で串珠杯の旧蔵者として提示した高木侗山について確認しておきたい。後述する丙、丁巻に登場する「高木半」、「高木簑田」は、侗山の別称であることが『福井村沿革誌』（松木俊正著、明治四十四年「一九一」序文、刊行年不明、以下『沿革誌』と略称）^{iv)}により明らかになったからである。また、丙、丁巻は、『沿革誌』に収載される人物が、参会者として名前を連ねていることが多いため、先に侗山についてみていくことにする。

『沿革誌』に収載される「高木簑田翁彰徳碑」の碑文には、「高木氏撰州三島福井名門世為郷士也、乃有簑田翁出、翁名正、字一止、稱半、簑田其號、又號洞山」^{v)}とある。「洞」の字が異なるものの、「洞山」「簑田」などの号からも、本記録帖に散見される高木侗山は、島下郡福井村（現在の大阪府茨木市）出身の人物で間違いないといえよう^{vi)}。また同書「人事」の「高木半」の項目には、彼の経歴も記

されている。主な事項を要約すると以下のようなになる^{七)}。

高木氏の祖は、「源頼光の子頼親五世の孫八條院判官代信光」で、大和国高木村に住み、「高木信光」と称したとされる。それから十八世末裔の「高木貞之丞之助貞政」の三男・彌左衛門俊政が乱世を厭い、福井村に隠棲し農業を始めた。この人物が、福井村の高木氏の「太祖」とされる。その後、五世の孫半兵衛正親は財を肥やし、金貸しを生業とし、慶安年間（一六四八〜五一）には、大坂に商店を開き、その後、甥を養い、子として、平野屋五兵衛と称させ、これを分家とし経営したという。

宮本又次氏によると、平野屋五兵衛は、寛永十三年（一六三六）、あるいは元禄五年（一六九二）に両替商を開店したという^{八)}。初代平野屋五兵衛は、福井村の高木半兵衛の分家であったが、「開店以来郷里の人を多く聘し」た、としている。なお、甲巻、弘化三年（一八四六）九月五日の酒宴には、

一 式息一曲 三井様御店／極遊

一 吞息 鯨吸

一 無息一曲 今橋店 清衛

一 無息一曲 〃 清陰

とあり、「今橋店／清陰」と、平野屋が店を構えていた土地の名も確認できる。また参会者に「三井様御店／極遊」とある点からも、当時の商家に関する酒宴であった可能性も示唆されよう。

一方で、乙巻、元治元年（一八六四）の酒宴に参会している大坂の四条派絵師上田耕冲（文政二〜明治四十四年・一八一九〜一九一一）は、「豪商平野屋五兵衛の後援を受け」たとされ、平野屋との関係が仄めかされる⁹。洞山と平野屋五兵衛とを繋ぐ資料がなく、これ以上の探求はできないが、串珠杯の伝来を考える上で、大坂の両替商・平野屋五兵衛の存在は無視できないものといえよう。

碑文の続きをみていくと、六世の祖半兵衛祐政は、高槻藩の郷士に命ぜられ、「槍一筋帯刀」を許されている。その後、洞山は、下島郡第一区戸長、大阪府会議員などを担っていたという。また「幼ナル時國學及和歌ヲ實父逸翁熊谷直好等ニ學ビ漢學ヲ廣瀬旭莊ニ學ブ」とあり、乙巻の酒宴記録にみられた、廣瀬旭莊との関連も触れられている。一方で、能樂に通曉する人物だったようで、「高木半^{なかば}」として、自身で能樂に関する書物も手掛けていたことが確認されている¹⁰。なお、碑文の年記に明治四十四年とあること、洞山は、当時「齢八十有五」とあることから、生年は文政十年（一八二七）と考えられる¹¹。没年については、明らかでない。

なお、丙、丁巻においてにも指摘できることであるが、甲巻の明治三年の参会者には、『沿革誌』の「人事」に掲載されている人物を見出せる。例えば、嘉永五年（一八五二）頃に組頭を勤めていた彦坂嘉七、「中株年寄役」に奉じたという上田儀樂、「鋳物製造ヲ創メ中株庄屋ヲ奉ジ永井日向守ノ命ニヨリ大砲鋳造ス」とある谷山増次郎などが名前を連ねている。

残念ながら、甲巻をみる限り、串珠杯を初めに誰が所有していた

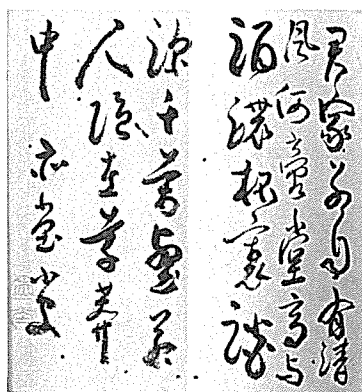
のかに関する記述は確認できない。少なくとも、酒宴記録帖には、洞山が生まれる前の記録が収められている。また、洞山が登場するまで、誰を中心とする集まりなのか、という点も判然としない。しかし、洞山の名前が頻出する嘉永六年以降に、串珠杯は、彼の所有となり、彼の活動の場であった大坂、さらには福井村を中心に使用されていたことがうかがい知れる。

三、丙（明治十四〜三十三年・一八八一〜一九〇〇）

洞山による「寿家翁」なる人物の米寿を祝う詩ではじまる丙巻。なお、丙巻以降、洞山ではなく「高木養田」「養田主人」として参会者に名を連ねている。主な参会者を次に挙げていく。

明治十四年（一八八二）に参加し、詩を揮毫している松浦亦堂（文化八〜明治十六年・一八一〜一八三）は、北摂地域を中心に儒学の教授に努めたとされる¹²。丙巻では、次のような詩を揮毫している。

君家萬月有清風
何堂高与酒濃
杯裏談深千萬望
若人陰在草莽中
亦堂小史（朱文楮円印）「亦堂」
一吸半盃 亦堂松浦淳



甲巻の慶応三年（一八六七）以降、「神田二柳」「二柳神田喜」な

どと名前が記される神田喜内は、福井村戸長、島下郡一小区区長を勤めた人物である。福井尋常小学校の学事委員（明治二十〇・二十二年・一八八七・八九）、及び同校の学務委員（明治二十六・三十二年・一八九三・一九〇〇）も担っていたとされる^{一三〇}。

明治二十五年、「晴耕雨読村莊」にて紅葉を楽しみながら催された酒宴^{一四}に参会している「室源」は、福井尋常小学校の学務委員を務めた室源十郎と考えられる。彼は、福井村村長を勤めるとともに、在任中に「戦役ノ功ニヨリ勲七等青色桐葉章ヲ賜」ったという。同じく、明治二十八年四月、「晴耕雨読齋」にて催された酒宴に参会している小笠弘は、福井尋常小学校准訓導（明治二十八・三十四年）であったという^{一五}。なお、『沿革誌』には、塩田正房（清次郎）の顕彰碑の碑文を書いたとされる^{一六}。

丙巻に収載される絵を確認しておくと、明治二十一年に「西山舎」なる場所で催された酒宴において、串珠杯で酒を飲む様子が描かれている（図4）。また、同じ宴では女性も参会していたようで、「是此五盃／おやすとて／呑むところ」と、両手で串珠杯を高く掲げて、一気に酒を飲み干す姿が素早い筆致で捉えられている（図5）。また、紅葉や桜といった題材も確認でき、季節に応じた花木を揮毫されたものもある（図6、図8）。なお、先述した明治二十八年四月、「晴耕雨読齋」における酒宴では、「月樵寫」と款記のある宴会図が添えられる（図7）。大皿に盛られた鯛を囲み、楽しげに語らう参会者のなか、画面中央で帽子をかぶり、眼鏡をかけた男性は、串珠杯で酒を嗜んでいる。月樵は、丁巻においても、書画を揮毫している

串珠杯の酒宴記録帳帖をめくって

ため後述することにする。

丙巻では十一度にわたる酒宴の記録が収められているが、そのうち伺山（養田）は、六度九回に渡って登場する。また、『沿革誌』に載る人物を含め、福井村にゆかりのある人物が多く見受けられる点も特徴といえる。

四、丁（明治三十八・三十九年・一九〇五・〇六）

丁巻は、唐代の詩人・李白の《春夜宴桃李園序》の一節、「飛羽觴而醉月」（羽觴〔酒杯〕を飛ばして月に酔う）から始まる。丁巻の記録には、明治三十八年、すなわち日露戦争中に催された酒宴記録が含まれており、旅順陥落を祝う宴（同年十一月十日）もみられる（図10、図11、図13）。酒宴の参会者は、丁巻においても伺山、『沿革誌』に収載される人物が多くを占めているといつてよい。

例えば、明治三十八年二月、晴耕雨読村莊における酒宴をはじめ、三度登場する彦阪樸（梅）吉は、「村会議員、学務委員、衛生組長、組合会議員」を務めたという^{一七}。『沿革誌』によると、樸吉の遠祖三代四郎兵衛は、高木半兵衛政親が「大阪今橋」にて両替商を開店する際に、業務の補佐にあたつたと記されている。

同年四月十日の「桜花之下小宴」の「上田亀」は、福井村会議員助役を勤め、日露戦争の功により勲章を賜った上田亀太郎と考えられる^{一八}。なお、甲巻、明治三年五月の酒宴における参会者、上田儀楽は、上田家二代の人物で「中株年寄」を勤めたという。

また、同年三月七日の「奉天旅順鐵嶺興京占領祝賀」と称した小

宴では、建築請負を業とし、鉄道工事に携わったとされる上田虎造の名前がみられる^{一九}。彼は村会議員、学務委員、土木委員を兼務したという。「其子政次郎氏ハ日露戦役ノ功勞ニヨリ金鵄勲章ヲ賜ヒ」とあるが、翌年には、彼の凱旋を祝した小宴が開かれている。

その他にも、明治三十九年における新年の祝賀の参会者の一人、「福井小学校ニ職ヲ奉ジ」た義光の長子で、「茨城(木)尋常小学校」で訓導職を勤めた神田義胤、雑穀商を営んでいた高間楳吉、内務省土木局技手を勤めた後、福井尋常小学校訓導兼校長の職に就いた「室彦」こと室彦太郎などが『沿革誌』に掲載されている^{二〇}。また、明治三十八年二月十七日の酒宴では、同書に名前を確認できる塩田正房による串珠杯の図が収められている(図12)^{二一}。

丁巻には、丙巻にも宴会図を揮毫していた月樵による「牡丹図」(図14)「箕面の滝」(図15)小豆島の「寒霞溪通天之図」(図16)「満州軍凱旋浪華之港」(図17)などの書画がみられる。月樵は、森琴石(天保十四〜大正十年・一八四三〜一九二二)の門人の一人で、大阪で活躍した画家である^{二二}。「箕面の滝」は、滝の前の庵で、紅葉を愛でながら語らう二人の姿が描かれている。侗山は、絵に添えて「我ハ酒に、紅葉ハ霜に色染ミて、ともに酔める秋乃葉かな」と詠む。これに対し月樵は「青女染成箕嶺楓盡図不若此天工一／溪又有瀑泉落白布高懸錦繡中」と返している。なお、丁巻に二図揮毫している柳江は、印章などから大阪の南画家・田中柳江(一八六六〜?)と考えられる。書画家の番付表といえる「今世名家書画一覽」(明治二十四年・一八九一刊行、神奈川県立近代美術館蔵「青木文庫」)の

「翰墨風流」の部門に、「全(筆者註…大坂)田中柳江」と確認できる(図9、図18)^{二三}。

いずれにしても、丁巻、丙巻と同様に参会者の多くが福井村、あるいは大阪で活動をしていた人々でといえる。丁巻の末尾には「八十翁／蓑田半」とあり、侗山自身が高齢に達していたことも、交遊範囲が限られたことの要因の一つと考えられよう。

おわりに

ここまで、串珠杯とともに伝来する四冊の記録帖の内、甲、丙、丁をみてきた。先述の通り、甲巻の嘉永六年以降、少なくとも乙、丙、丁巻が記録された時期の串珠杯の所有者は、侗山に間違いはない。しかし、侗山の生年が文政十年であることを踏まえると、甲巻の表面に収載される記録は、侗山以外の人物が中心となつて酒宴を開催していたと考えられ、旧蔵者については今後の検討を要する。

一方で、高木侗山が交遊を持った人々のなかには、人名録に収載される人物が含まれており、当時の文化人の交流を知るうえでも興味深いものといえよう。丙、丁巻においては、福井村の人々との交遊が色濃く、侗山が身近な人々と楽しむ姿が映し出されていたといつてよい。およそ百年もの間に開催された酒宴を収める四冊の酒宴記録帖は、串珠杯そのものが辿ってきた歴史を今に伝えてくれている。

一 京都で活躍した望月派の三代目。名は「重輝」又は「輝」、字は「子瑛」。初め村上東洲に学び、後に岸駒に師事し、一家を成したとされるが、呉春にも私淑していたとされる。『平安人物志』（文政五年版）には、「畫」の部門で「望月輝 字子瑛、号玉川／鳥丸竹屋町南 望月玉川」とある。

二 『平安人物誌』（文政五年版）には、「筆法家上代様書家」、及び「碁」の部門に、「河北房種 字伯隆 鳥丸下立賣北 河北耕之」とある。同書文政十三年（一八三〇）版、天保九年（一八三八）版、及び『皇都書畫人名録』（弘化四年・一八四七）にも名前を確認できる。

三 「墨莊」については、記録帖には一度しか登場せず、情報を得ることとはできないが、吹田ゆかりの画家金子雪操に師事した桑田墨莊の存在が示唆される。『第二回内国繪画共進会出品人略譜』（国文社、一八八四）には、「桑田文輔墨莊ト號ス、大坂府東區船越町二丁目ニ住ス、桑田秀橋（號樂山）ノ男ナリ、畫ヲ金子美翁號雪操ニ學ヒ師歿ス後鼎金城ニ從ヒ周防安藝備前駿河横濱等ヲ遊歴ス」とある。

四 大阪府立中之島図書館所蔵本を参照。明治四十四年（一九一）の序文が付されるが、刊行年は不明。

五 前掲書四、二十丁表、「高木簑田翁彰徳碑」より引用。なお、三十号で、侗山の印章の一つを「式之」と判読していたが、同書の記載から本号では「式止」と訂正する。

六 本誌第三十三号にて廣瀬旭莊「高木氏書畫帖」の序文にみられる「住福井邑」に対し、摂津国豊島郡、及び島下郡の福井村を候補として提示したが、改めて島下郡福井村（現在の大阪府茨木市）であると訂正する。

七 前掲書四、三十二丁・表、裏「高木半」を参照。

八 宮本又次「第六 天王寺屋五兵衛と米屋平右衛門」（『宮本又次著作集』第八卷 大阪町人論、株式会社講談社、一九七七）を参照。

九 池田市立歴史民俗資料館編集・発行『日本画家上田耕夫・耕沖・耕甫』（一九九四）を参照。

串珠杯の酒宴記録帳帖をめぐって

一〇 中尾薫「能楽の近代化と高木半…その履歴と能楽改良論への能役者の反応をめぐって」（『待兼山論叢 美学篇』四十七号、二〇一三）を参照。能楽に関する書籍は、「高木半」の名で活動を行っている。なお、『新楽』巻之一（むら雪）（山岸弥平出版、一八八三）の奥付には「著述人大阪府平民高木半／摂津國島下郡福井村千番地」と住所が記されている。

一一 高木半著『能楽謳節奏の栞』（吉田善之助、一九二二）の序文には「明治四十五年一月／八十有六翁高木半識」とある。また、後述する丁巻でも明治三十九年三月の酒宴において「八十翁／蓑田半」と記しており、侗山の生年は文政十年と考えられる。

一二 茨木市史編纂委員会『茨木市史』（茨木市役所、一九六九）、及び茨木市史編さん室編集『新修茨木市史』第二卷 通史Ⅱ（茨木市、二〇一六）を参照。

一三 前掲書四、三十七丁・表「神田喜内」を参照。

一四 記録帖には、「宴酔之時主人蓑田携一／奇杯来（宴酔の時に、主人蓑田が奇杯を一つ携え来たる）」とある。当時の人々にとっても串珠杯は「奇杯」であったことがわかる。

一五 前掲書四、「第拾教育」の「教員異動」において「一自明治廿八年十月至卅四年八月死亡準訓導小埜弘」とある。

一六 前掲書四、二十丁・表を参照。

なお、同じ賛文が記載される「伝高木半像」が『新修茨木市』第三卷、通史Ⅲ（茨木市史編さん室編集、茨木市、二〇一六）、三六一頁に掲載されている。

一七 前掲書四、三十六丁・裏、三十七丁表「彦阪榎吉」を参照。

一八 前掲書四、三十七丁・裏「上田龜太郎」を参照。

一九 前掲書四、三十六丁・裏「上田虎造」を参照。

二〇 前掲書四、二十九丁・裏「神田義胤」四十丁・表「高間榎吉」、四十一丁・裏「室源十郎」を参照。

二一 前掲書四、二十丁・表を参照。同書によると、塩田正房は副戸長、村長などを勤めるとともに、米の品種改良にも従事し、酒の

原料として重宝され、村民に利を得させたとされる。

- 二三 河副作十郎、大河原久編『扶桑書画譜』（明治二十二年・一八八九刊行）六冊の内、四冊「日本摩野布引瀑布泉」に「明田三瓶、名皋、字守仲、號月樵、大阪蘆分橋北九篠村住」とある。「森琴石.com」(<https://www.morikinseki.com/index.htm>／平成三十年十月三十日閲覧)を参照した。「寒霞溪通天之図」に寄せた漢詩の印章に「白文方印」「明田皋印」とある。なお、記録帖で確認できる月樵の款記、印章は次のとおり。

- ・明治三十八年四月廿一日／「朱文橢円印」「月樵」
- ・(図14) 月樵謹寫以拝／杯不挙謝亀「白文橢円印」「明田」
- ・(図15) 月樵翁「白文橢円印」「月樵」
- ・(図16) 月樵寫「白文橢円印」「月樵」
- ・(乙巳臘月題) 月樵「白文方印」「明田皋印」、〔朱文長方印〕「仙堂」／「白文長方印」〔判読不可〕
- ・(図17) 〔朱文橢円印〕「明田」

- 二三 東京文化財研究所「書画家人名データベース（明治大正期書画家番付による）」(http://www.tobunken.go.jp/materials/banduke_name/／平成三十年十月三十一日閲覧)を参照した。なお、「増補古今書畫名家一覽」（明治四十五年・一九一二改正、大阪石塚猪男蔵）には、「今人南北画各混名家」の項目に「大阪田中柳江」、「大正五年度帝國繪畫番附」（大正五年・一九一六、神奈川県立近代美術館蔵「青木文庫」）には、「田中柳江 京都市三篠通大橋東入三ノ 【四條】（山人）」とある。
- 丁巻に「柳江」の書画は、二図収載されている。款記、印章は次のとおり。

- ・(図9) 柳江作「白文方印」「直印」、〔朱文方印〕「井橋」／〔朱文橢円印〕「柳江」
- ・(図18) 柳江「白文方印」「田直士印」、〔白文方印〕「田義郷」また、田中柳江については、川見典久「資料紹介」二代黒川幸七に関する書簡『『古文化研究』第七号、二〇〇八)を参照した。

※資料からの引用は、基本的に原文表記のままとした。

また、■は筆者が判読できなかった箇所である。

資料の翻刻につきましては、当館学芸員・小野田一幸氏にご教示いただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

【挿図】 ※記録帖の年代順に掲載。
《甲巻》

図1



図2

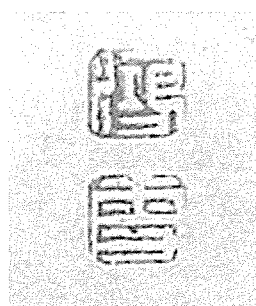


図3

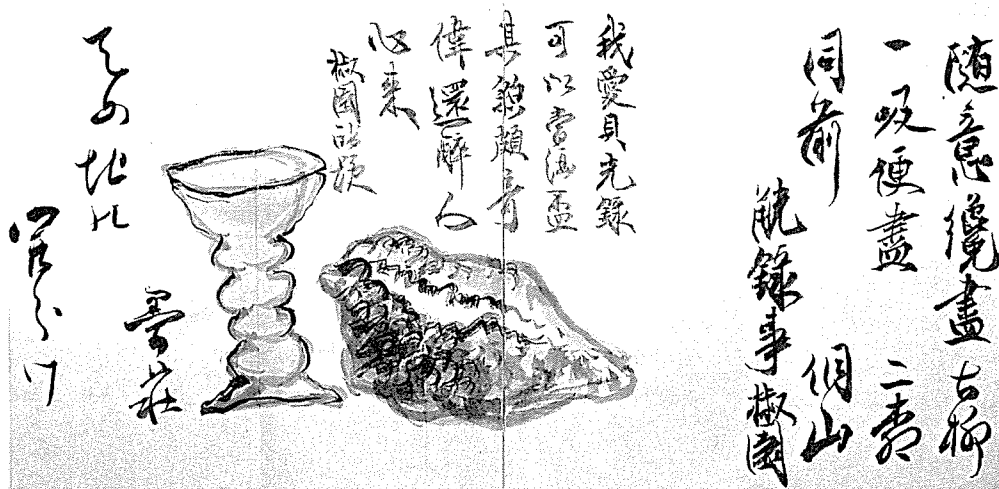


図4

《丙卷》

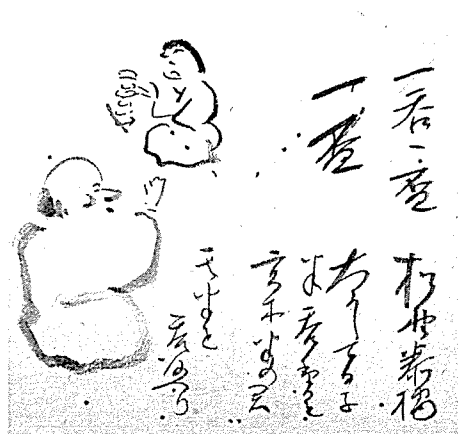


図5



図6



図7





图
9

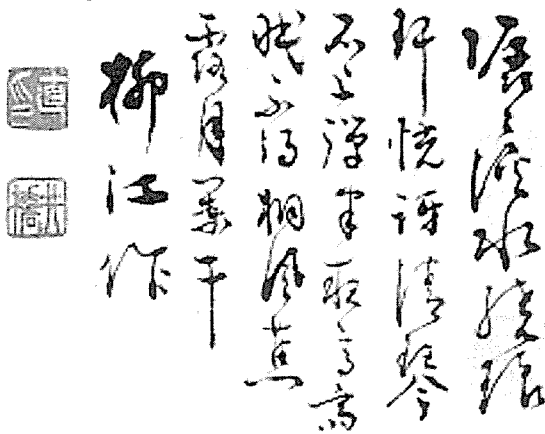
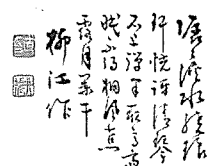


図 11



図 13

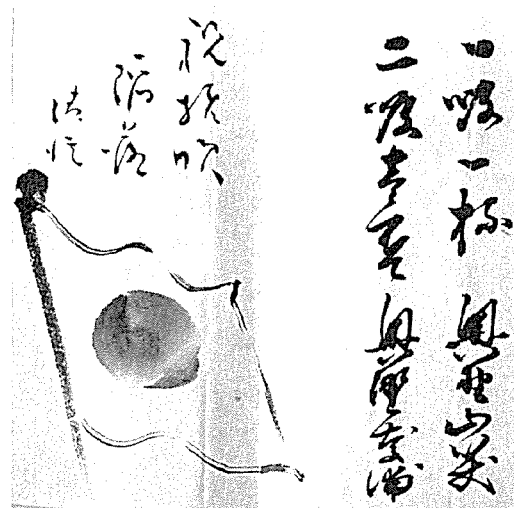


図 14



図 12

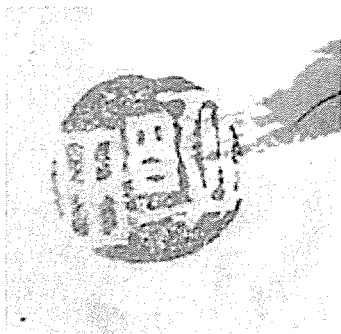




図
15

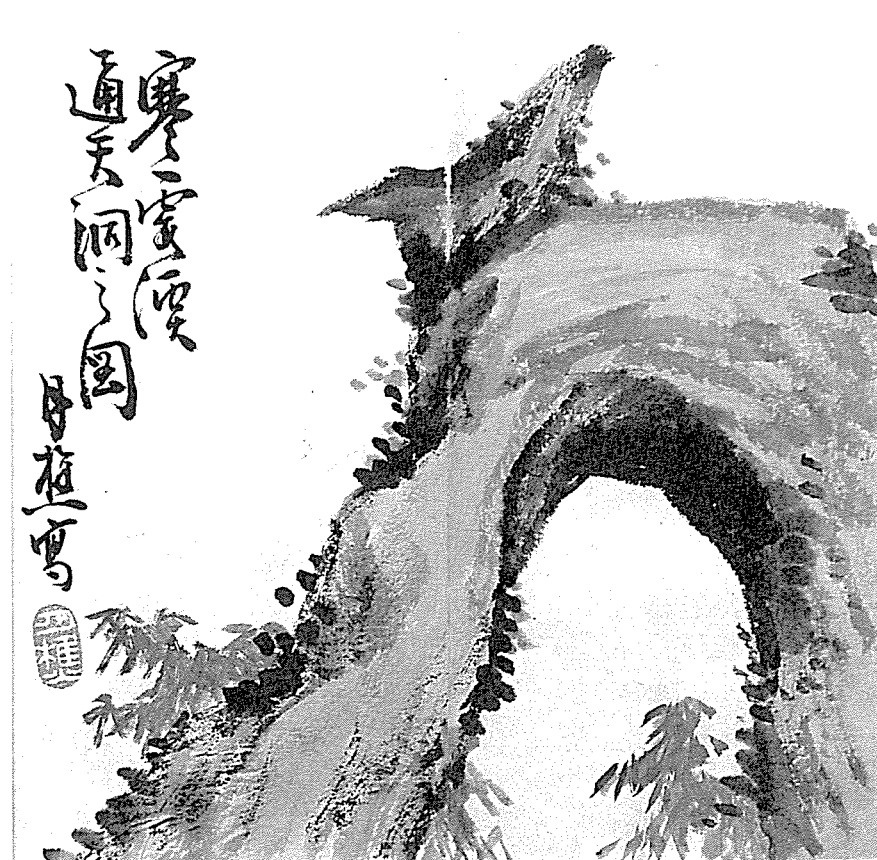


図
16

図
17

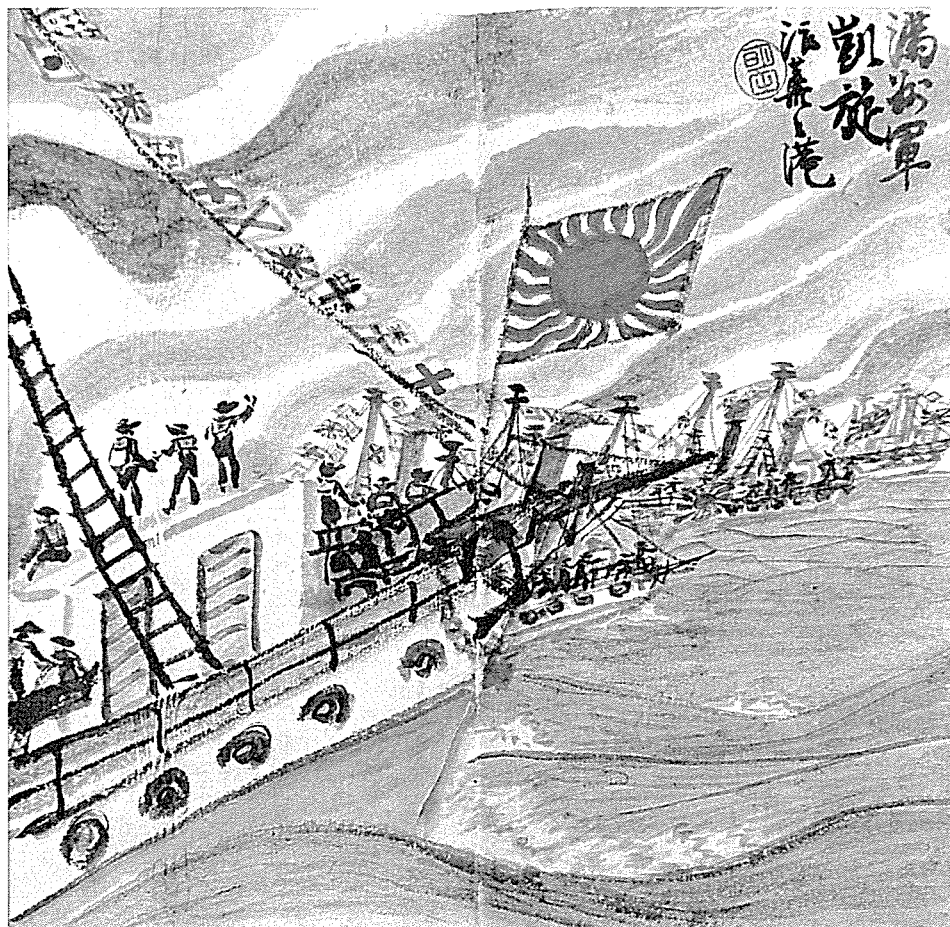


図
18

